

書 評

山根 拓・中西僚太郎 編著

『近代日本の地域形成

—歴史地理学からのアプローチ—』

海青社 2007年9月刊

B5判 260頁 5,200円＋税

本書は1999年に発足した日本地理学会の「近代日本の地域形成」研究グループに結集した「中堅・若手の」地理学者たちの研究成果の一つと理解することができる。1960年代以降の日本の地理学界における大きな変化の一つは、明治から第二次大戦頃までの「近代日本」を積極的に研究の視座に据え、その形成過程や特徴・意義などを明らかにする姿勢の確立にあった。このことを編者の一人である山根は「まえがき」のなかで、地理学の世界では、「歴史学が陥りがちな没空間的な説明を是正し、空間的な差異・パターンを具体的に復原・明示した」とした後、本書では「先行研究の成果を引き継ぎつつも、地理学界の内外・国内外の学術研究の潮流に目を向け、新たな視角を採用して近代日本像に迫ることを試みた」「特に意識した論点・視角は、国家・社会・個人という3主体が近代日本という特定な時代・空間の中でいかに関係しあい、結果的にいかなる地域が形成されたのかということ、現象形態としての地域が生成する背後にはいかなる近代日本の構造が存し、その構造と個人（人間主体）の空間的行動とはどのように関わっていたのかということ、ある言説や事象を同時代の文脈の中でいかに捉え位置づけるかということ、物質的な空間のみならず表象的な空間にも着目してゆくこと等である」と高らかに宣言する。本書はこのような目的に対して、どのように応えているのであろうか。

まず、本書の構成と執筆者を一瞥してみよう。

第1章 近代日本の地域形成に関する地理学的アプローチについて（山根拓）

第2章 明治期の茨城県における牛馬耕導入・普及をめぐる官民の動向（中西僚太郎）

第3章 近代日本におけるフロンティア景観と近代的表象—三里塚牧場を事例に—（椿真智子）

第4章 北関東における温泉地の発達とその変

容（関戸明子）

第5章 地方銀行と産業組合からみた地域形成—長野県東信地域を事例として—（川崎俊郎）

第6章 高圧送電網の形成と空間編成（天野宏司）

第7章 鉱業権者の変遷からみた新潟県の油田開発（品田光春）

第8章 「通い」の再生産—大阪の近郊住宅地・池田町室町の事例から—（三木理史）

第9章 都市計画における運河事業の展開（岡島建）

第10章 商家同族団の変質と地方都市の変容（河野敬一）

第11章 国土空間の編成と近代長崎—人間主体と構造の關係に注目して—（山根拓）

第12章 植民地期の朝鮮における水産加工業—缶詰製造業を中心に—（河原典史）

各章はそれぞれが独立した論文であり、相互の関連はない。唯一の共通キーワードは「近代日本」における諸事象の変容を取り上げていることであるが、それぞれの扱うタイムスパンは、あるものは明治中期に限定されていたり、あるものは大正期以後、あるいは戦後昭和期に及ぶものもあって、かなり異なっている。しかし、中央あるいは東京中心のシステムに統合されるような傾向のなかで、特定地域の独自性や、地域性、あるいは地域内の差異の把握とその要因分析などが、程度の差こそあれ、各執筆者の意識のなかに努力目標として存在していることは看取される。だが、その方法論はとても統一されたものとはいえない。スペースの制約の大きい書評欄で各章について内容の詳しい紹介はできないが、題名を敷衍する程度に触れることとする。

山根論文（第1章）は本書全体の理論的総括と考えられる。山根は本書の執筆者11人中のなかでの最大（あるいは唯一）の理論家であるが、実態論を抜いた抽象論のみの紹介はかなり難解である（もっともフィールドワーカーとして実態研究に徹してきた評者の能力の問題であろうが）。近年現れた英語圏の歴史地理学の理論を紹介したのち、それぞれの諸事象が近代日本全体が志向する

「構造」に再編成されるなかで、空間内部の差異化、分極化、個々の主体の行為によって独特の部分空間が再生産される過程などを追及するという意識が本書に収録された諸論文では共有されているとする。ただ、本当にそうなののか、その是非は読者の判断にまきたい。

中西論文（第2章）では、関東地方のなかでも群馬・栃木県と比較して牛馬耕が遅れて導入された茨城県の実態とその要因が、官側と民間側の動向を比較しながら論じられている。椿論文（第3章）は、欧米の農業技術や種畜・栽培品種の導入・改良などの意味で先駆的な牧場を意図した三里塚牧場において、西洋式牧場景観と経営スタイルに特徴付けられる近代景観は、都市住民にとって非日常的な空間・景観と意識されて観光資源化される過程をガイドブックや文学作品の描写によって描く。関戸論文（第4章）は、北関東に分布する多数の温泉群が鉄道交通の発達とツーリズムの普及によって治療・療養目的から行楽・保養・慰安目的に変容すると同時にそれぞれの特徴の分化を述べる。川崎論文（第5章）では、長野県東信地方の農村部の経済活動の基盤として多数現れた地方銀行が大勢としては合併・淘汰を経て都市集中に向かうのに対し、農村部への資金供給のための金融機関維持の重要性が強く、産業組合への転換は地域側の自律的な対応であるとする。天野論文（第6章）では、大正期以降の高圧送電網の発達によって、電力会社間の電力融通が普及した結果、各地の小資本電力会社が発達し、供給能力の増大、供給区域の再編成（合理化）などが進んだことが栃木県栃木町を事例として述べられる。品田論文（第7章）は、新潟県における油田開発を鉱区と鉱業権者の変化を追跡することによって、油田開発主体の変化を明らかにし、少数の地域外大資本の支配に移行してゆく過程を明らかにする。三木論文（第8章）では、大阪における「通い」（通勤・通学）の発生を明治末の教育程度の高い俸給生活者の増大の結果とし、池田室町住宅の住民名簿から論じた。もっとも通勤・通

学人口の大量化はむしろ大正末期より盛んとなるのであるが、その時代にまでは分析が及んでいない。岡島論文（第9章）は近代開削の都市運河、とくに1920年施行の都市計画法によってつくられた運河、川崎における運河計画について述べ、当時の港湾が運河と結びついていたことを指摘する。河野論文（第10章）は、地方都市における商家の暖簾分けなどによる同族集団の形成と解体の過程、その機能的結びつきの実態を小諸の柳田茂十郎家を例として考察し、これを地方都市の商業中心機能の低下と絡めて論じている。山根論文（第11章）では、Predによるボストンの歴史地理学的研究にヒントを得て、近代長崎の地域形成に重要な役割を演じた貿易・港湾機能と三菱長崎造船所の意義と変容を論じ、地域形成と深くかかわった3人の個人誌に触れた。河原論文（第12章）では、朝鮮半島南部から次第に北部に拡大する日本人による水産缶詰工場の立地展開をその社会的背景とともに全体的に論じた後、竹中缶詰製造所という一企業の事例を考察している。

最初にも述べたように、本書は、山根によれば、国家・社会・個人という三つの主体が近代日本という特定の時代と空間のなかで関係しあって、いかに地域を形成してきたかを考察することを目指しているとする。しかし、各執筆者のテーマがあまりにも多様であるために、各論文がこのような視点を共通に持っているとはいいいく部分もある。多くの執筆者の寄稿によるこの種の論文集では、このことは当然のことといわねばならない。近代化というものが、多くの地域的な問題点と差別化を含みつつ進行するものであることは、忘れてはならない視点である。一つ一つのテーマが将来、近代日本の歴史地理学を考える上で重要なテーマであり、各執筆者は上記の共通する視点を念頭に置きつつも、独自の立場も取り入れて論じていることはいうまでもない。将来の完成を期待したい。

（青木栄一）